

不可逆な時間を生きる人間

—「文化心理学ワークショップ」報告—

田中彰吾 現代教養センター教授

〔報告〕

2016年7月23日、文化心理学の入門ワークショップを東海大学湘南キャンパスで開催した。文化心理学(cultural psychology)は、社会的コンテキストのもとではたらく高次の心の機能(想像力・創造性・意志・記憶・自己など)を解明しようとする学際的な心理学である。現在、デンマークのオーホルボー大学には、世界で唯一「文化心理学」の名称を冠する研究センター(Centre for Cultural Psychology)が設置されている。この日の翌日から横浜で国際心理学会議(ICP 2016)が予定されており、後述するヴァルシナー氏をはじめ文化心理学センターの関係者が来日する関係で、本企画が実現した。

企画そのものが持ち上がったのは、この半年以上前のことである。2015年11月に文明研究所主催の国際シンポジウムをデンマークにある東海大学ヨーロッパ学術センターで開催した折、文化心理学研究センターのルカ・タテオ氏に基調講演でお越しいただいた。別稿でご覧いただける通り(『文明』No.20, pp.1-2)、このシンポジウムでは文明(さらには文化)をめぐるさまざまな議論がなされ、何らかの形で同種の議論を日本でも続けたいという貴重な提案がタテオ氏からあったのを受けて、主にタテオ氏と筆者とのやり取りを通じて企画の具体化に向けて動き始めたのだった。

「文化心理学」という名称を最初に聞くと、多くの方は「異文化との出会い」や「文化の違い」といったイメージを持たれるのではないと思う。グローバル化が進展しつつある社会においては、「文化」という言葉や概念そのものが、異文化に接触する経験と、そこから反省される自文化のあり方、というしかたで焦点化されやすい。心理学でもこうした発想のもとづく研究は「比較文化心理学(cross-cultural psychology)」と呼ばれる分野でなされている。特定の心理作用について、異なる文化的背景を持つ研究参加者のデータを収集・比較し、文化が心のはたらきに与える影響を明ら

かにしようとする研究である。

しかし、文化心理学はこうした見方に立つものではない。比較文化心理学は、「文化」がその内部にいるメンバーに対して均質に作用し、その外部のメンバーに対しては異質に作用することを前提としている(詳しくは次を参照: J・ヴァルシナー『新しい文化心理学の構築』サトウタツヤ監訳、新曜社、2013年)。ところが、全メンバーの均質性を想定できるほど現代社会は単純ではない。各メンバーが多様な組織・集団・制度にまたがって生活を送る複雑な社会である。そうした社会で、過度に一般的な「●●文化」というラベルのもとで集団間の比較を行っても、得られる知見の信頼性にはおのずと限界がある。

ただし、人間の生にとって、また、それと切り離せない心のはたらきにとって、文化は無視できない重要な要因である。そこで文化心理学が着目するのが「記号」である。記号は、交通信号から呪術的な象徴まで、それ自身とは別の何かをあらわす。ヴァルシナー氏の著作には、哲学者パースの記号論の引用に続いて、次の印象的な一文が登場する——「記号は心によって作られ、心は記号を通じてはたらく」(p. 29)。私たちの心は、意味を伝える存在としての記号を生み出すとともに、その記号を通じて記憶や想像や思考といった高次の機能を実現している。文化は、心の外側にあつて人々の行動を型にはめる鋳型のようなものではなく、むしろ、心に内在して心の機能そのものを可能にする記号の総体である。

前置きが長くなったが、ここで伝えておきたかったのは、文化心理学にとって「文化」とは、既存の心理学に冠として付け足された飾りではないし、心理学によって解明が期待される研究対象でもない、ということである。文化はむしろ、「心」を解明するうえで方法論的な観点を提供する重要な概念なのである。

当日は、ヴァルシナー氏、タテオ氏に加えて、同じく文化心理学センターでポストドク研究員を務めるG・マルシコ氏の三名の講演を伺った。各講演の内容についてここで紹介しておこう。ヴァルシナー氏の講演は「抑制された志向性: 行動

の根本的な不確定性」と題するものだった。従来の実験心理学は、人間の行動に潜む法則性をとらえようとして各種の実験を重ねてきた。ヴァルシナー氏はこれに対して、人間が不可逆な時間の流れの中で意図や決断をもって振る舞う姿に着目する。彼が強調するのは、原因と結果を結ぶ直線的な法則性ではなく、記号を用いて思考し、意思決定を何重にも複雑化させる心のあり方である。

講演中、次のような課題が聴衆に出された。財布を手に取り、もっとも高額な紙幣を取り出す。金額を確認し、それで何が買えるか考える。その段階で、「紙幣を床に投げ捨ててください」という指示が出された。その後少したって「紙幣を捨ててください」という指示が出された。ヴァルシナー氏がこの課題を通じて私たちに注意をうながしていたのは、それぞれの行為の分岐点での主観的な感じ方である。紙幣を投げる瞬間は「捨てれば想像しているモノは買えなくなる」「紙幣を捨てずにやり過ごすこともできるし、そうすれば想像したモノが買える」といった考えが思い浮かぶ。捨てる瞬間にも「これでさっき想像したモノが買える」「やっぱりお金がもっていないから何も買わないことにしよう」等の考えが浮かんでくる。

人生という不可逆な時間の流れを生きている人間は、重大な決断が求められるそれぞれの行為に際して、記号に媒介されつつ、思考を展開し、可能性の世界に想像をめぐらし、過去の記憶を振り返るとともに、未来に向かって創造的に決断を行う。通常の実験心理学が原因と結果といういわば横軸の直線的な時間性にもとづいて人間をとらえる試みだとするならば、文化心理学は、行為と行為のはざまに、記号に媒介されて行為に介入する縦軸の時間性にもとづいて人間をとらえようとしている。そうした観点の違いを強調する講演であった。

タテオ氏の講演は「想像的過程と文化」と題するもので、いわゆる想像力の問題を扱っていた。想像するという営みは、現実には存在しないが存在するかもしれないもの（可能性）、また、まだ起こっていないがこれから起きること（未来）について像を描く心のはたらきである。このような心のはたらきを理解するうえで参考になる考え方が哲学者パースの提唱したアブダクションである、というのが講演の主な論点だった。

アブダクションは「仮説推論」と訳されることもあるように、演繹とも帰納とも異なる推論形式である。演繹は論理規則にもとづいて必然的な結論を導き出す過程であり、帰納は個々

の具体的事実から一般的な法則を導き出す過程であるが、アブダクションはそのどちらでもない。ある事実が観察されたときに、その事実を成立させている仮説を洞察とともに見出す過程である。タテオ氏は、化学者のケクレが自分の尻尾を噛む蛇ウロボロスの夢を見てベンゼン環の構造を洞察した事例に言及しながら、一方でアブダクションについて説明しつつ、他方でそれが想像力のひとつの発露の仕方であると指摘した。

この要約からも分かる通り、タテオ氏もヴァルシナー氏と同様、不可逆な時間の流れを生きる人間という見方を強調していた。人生を織り成す時間は不可逆であり、未来は、現実の世界にいままだ到来していない未知の可能性である。そうした可能性に立ち向かいつつ生きる人間は、目の前に広がる現実を手がかりにして、想像力をうまくはたらかせることで、未来について仮説的な見通しを立て、自分の身を処している。想像力は、不確かな未来に差し向けられた人間に宿る、適応的な心の作用なのである。

マルシコ氏の講演は「文化心理学における境界」というタイトルで、さまざまな場面で私たちが経験する「境界」の意味を読み解こうとするものだった。建物の内と外、敷地の内側と外側、自己と他者、内集団と外集団、人工と自然、昼と夜、過去と未来、等々、人間の活動は、各種の境界とともに意味あるものとして成立している。それは陸と海の境界のように、自然に内在するものが記号的に意味を持ち始める場合もあるし、敷地と敷地を分かつ塀のように、最初から人為的に設定される場合もある。

だがいずれの場合も、それがひとたび「境界」として機能しはじめると、内部と外部の差異が生まれ、人間を境界の内部に同一化させ、人間を境界の管理に従事させるようになる。それは、個人として自己アイデンティティを守ろうとする場合にも言えるし、集団としての輪郭を明確にして外部から自分たちを防衛する場合にも言える（たとえば、他人との違いを強調して自分の存在を主張する場合や、国として国境を管理する場合を思い浮かべてみるとよい）。境界は、外部から差異化された内部を生み出し、内部に特権的な価値があるかのように感じさせる記号なのである。

マルシコ氏の主張は、境界の持つこうした一般的な作用を認めつつ、「境界そのもの」の持つ革新性を人間の生に結びつけて理解しようとする点にあった。境界は一見すると「線」

のように見えるが、実際には広がりのある「ゾーン」であり、内部と外部の交渉、交渉を通じたつながり、つながりから生じる内部の刷新、という一連の事態が生じる場所である。生の問題として言うと、人間はつねに過去と未来の境界である「現在」に置かれている。現在という境界を生きることは、過去から未来に向かって、絶えず新たに生成する自己を生きることを意味している、ということが講演の趣旨だった。

今回はワークショップということで、各講演の後に質疑の時間を長めに設けたが、公演終了後にも指定討論の時間を別に設け、さらに議論を拡大した。指定討論者として、本学教養学部の小貫大輔氏、サレント大学（イタリア）のS・サルヴァトーレ氏にご登壇いただいた。

小貫氏からは、ご自身の自己紹介を交えつつ、不可逆な時間を未来に向かって生きるこの意味についてコメントが寄せられた。人生のそのつどの局面で未来に向かって行為を決断することは、どの程度自由な選択でありうるのだろうか。未来の自分を思い描きつつ生きることは、夢のあるポジティブな生き方であるように思える一方、あるべき未来の姿によって現在の生き方の選択肢を狭める面もある。かといって、いまの自分が欲するところだけに従って生きることは、奔放ではあっても未来の自分を作ることに役立つかもしれない。現在、未来、自己、自由という論点についての指摘だった。

続いてサルヴァトーレ氏も、小貫氏の指摘を引き継いで時間に関する質問を提示された。時間について私たちは「過去」「現在」「未来」というカテゴリーを自明視して議論しがちであるけれども、過去と現在が私たちの経験に与えられている（あるいはすでに与えられた）のに対して、未来は決して与えられることがない。未来はいまだ到来していない時間の局面であり、経験を離れて心的に表象されるしかない。未来という時間性について、文化心理学ではどのような理論的展望を持っているのか、という趣旨の質問だった。

ヴァルシナー氏の応答を筆者なりに要約すると次のようになる（なお、指定討論は当日のメモにもとづいて再構成しており、議題にのぼった論点すべてを網羅できないが、その点をご容赦いただきたい）。時間が不可逆であるということは、一般的な自然科学の方法論では適切に扱えない。自然科学は時計で計測できる客観的な時間と、その時間に準拠して生起する事象の因果関係を主に扱う学問であり、実験は特定の因果関係を繰り返すことができるという前提に立っている（可

逆的であるかのように時間という要因を扱っている）。フランスの哲学者ベルクソンは、自然科学の客観的な時間の見方を批判し、人間がそれを生きている不可逆な時間を「持続」という概念でとらえ直している。

人間は持続としての現在を生きつつ、記号の力を借りることで、未来に起こりうる経験と、これから到来しうる世界について、さまざまな可能性を思い描く。それによって、現在という時間の境界は、たんに点的に過ぎられる瞬間であることをやめ、未来の行為への方向づけを獲得するようになる。このような方向づけは、個人レベルでは未来に向かってのフィードフォワードとしてはたらく。その一方で記号は集合的レベルで作用するものでもあり、社会規範のように行為を外側から制約する面もある。いずれにせよ、不可逆な流れのうちにある「いま」という局面に密着しつつ、人間の行為を誘導したり制御したりする要因がどのように作用しているかを、「記号的媒介」という観点から理解することが文化心理学の理論的課題である。そこでなされる行為の選択は、自由という性質を基本的に有する一方で、必ず記号に媒介される点で一定の制約も課されている。

以上の指定討論の他にも、さまざまな問いをめぐって議論がなされた。文化と自然の関係をどう考えるべきか、ある文化の対外的な異質性に目を向けることもやはり重要ではないか、言語が違うことに由来する心のはたらきの違いを解明する必要があるのではないか、文化心理学は自然科学（とくに生物学）が明らかにする人間像をどのように考えるのか、文化心理学と社会学や文化人類学はどう関係するのか、文化心理学はいわゆる質的研究にとって重要な方法論を提起しているのか、等々、この場では紹介しきれないほど多くの、また重要な論点をめぐる質問が出されて、ワークショップにふさわしい議論の場になった。

内容上のアウトラインはおおよそ以上の通りである。今回の企画は、主な使用言語が英語、開催場所も都心から遠い湘南キャンパスという条件であったため、参加者が少ないかもしれないことを事前に危惧していた。ところが当日は、学内外の研究者、大学院生、本学の留学生を中心に約40人が来場する盛況ぶりであった。この企画は、当初、筆者（田中）の科研費プロジェクト（「Embodied Human Scienceの構想と展開」）の一部として立ち上げ、年度が変わった段階で文明研究所の主催イベントとして引き継いでいただき、各種の

事務的なサポートを得て開催にこぎつけることができた。文明研究所の関係諸氏、共催としてご協力いただいた国際教育センターおよび現代教養センターの関係者、講演・討論・オーガナイズに快く応じていただいた先生方、準備段階から手伝ってくれた大学院生の諸氏、当日の熱気ある議論に参加いただいた皆様に、この場を借りてお礼を申し上げておきたい。